

参考図 1 末期ローマ帝国地図 ～ゲルマン人の侵入と皇帝ユリアヌスのペルシア遠征～

出典：週刊朝日百科



はじめに

フランスの城郭シリーズ 1 「ガロ・ローマン時代のパリ」の最後の予告に従えば、フランスの城郭シリーズ 2 は「ゲルマン人一派のフランク人中心の城郭都市パリ」となるが、城郭の話は、建物だけでなく、時代背景や物語が重要なので、今回は、その辺の歴史を少し詳しく説明する。東方からのフン族の侵攻、ゲルマン人の大移動、西ローマ帝国の崩壊、アラブ人の侵入、などを経て、ゲルマン人の一派のフランク人がガリアでフランク王国のメロヴィング朝を建国する約 400 年の話です。

1. 「ガロ・ローマン時代のパリ」以降のガリア (フランス)

① ゲルマン人の大移動

イギリスではローマ軍が侵攻してケルト人を西方に追いやり、ローマ帝国がゲルマン人に襲撃されて引き上げた後は、イギリスは無法地帯になり、ゲルマンの**アングロ・サクソン人**が侵入してきたが、1066年に初代のイギリス王になったのは、北方から船で襲撃してきたヴァイキング (海賊) 出身の**ノルマン人**だった。(KPC 投稿「最後のイギリス旅行その 4」参照)

フランスではローマ支配下のガリア人は、ローマ軍が撤収してもどこへも行かなかった。ガリア人は森の人だった、そこに持ち込まれたガロ・ローマン文化とは**農業**である。ローマ帝国とその支配地へ穀物が売れるようになり、農業が画期的に繁栄した。

ローマ軍の指揮系統を担当する幹部は、ラテン語を話すローマ人だが、一般の兵士のほとんどが傭兵だった。

図 1 は 5 世紀のライン川周辺のローマ軍の駐屯地を示す地図である。ライン川に沿って「**リームス防衛部隊**」と記された太い線で示された所にローマ軍が建設した Limes(リメス又はリーメス)国境線があり、遺跡が世界遺産になっている。

(出典：フランス史 山川出版社) ローマ帝国の北の国境はライン川とドナウ川だった。ライン川はスイスから北にくだり、ドイツをってオランダのフリースランドで北海に出る。ドナウ川はスイスから東方にながれて最後は黒海に流れる。

皇帝ユリアヌスが戦っていた**アラマン**人は、ライン川とドナウ川の上流のゲルマニア外に住んでいた。ライン川を北海に向かうと、フランク人が川の東西に住んでいることが分かる。川の東側（右岸）のフランク人はリプアール族、左岸のフランク人は**サリー族**であった。

サリー族は、ローマ軍の協力者になり、そのうちに、ローマ軍に勝利してゲルマン人で初めてキリスト教の洗礼を受け、ガリアを統治するフランク王国のメロヴィング朝を築いていく事になる。サリーは、**サリカ法典**の語源になった。

ローマ皇帝**ユリアヌス**の軍がゲルマンのアラマン人と戦うのに、ローマ軍にはゲルマンのフランク人が傭兵として加わっていた。

「**ローマはローマ人が軍隊に入るのを嫌がるようになって滅びた**」と言われる通りであろう。

395 年にはローマ帝国は東西に分かれ、476 年には西ローマ帝国は崩壊した。東ローマ帝国は、ビザンツ帝国としてさらに 1000 年尚も存続する。

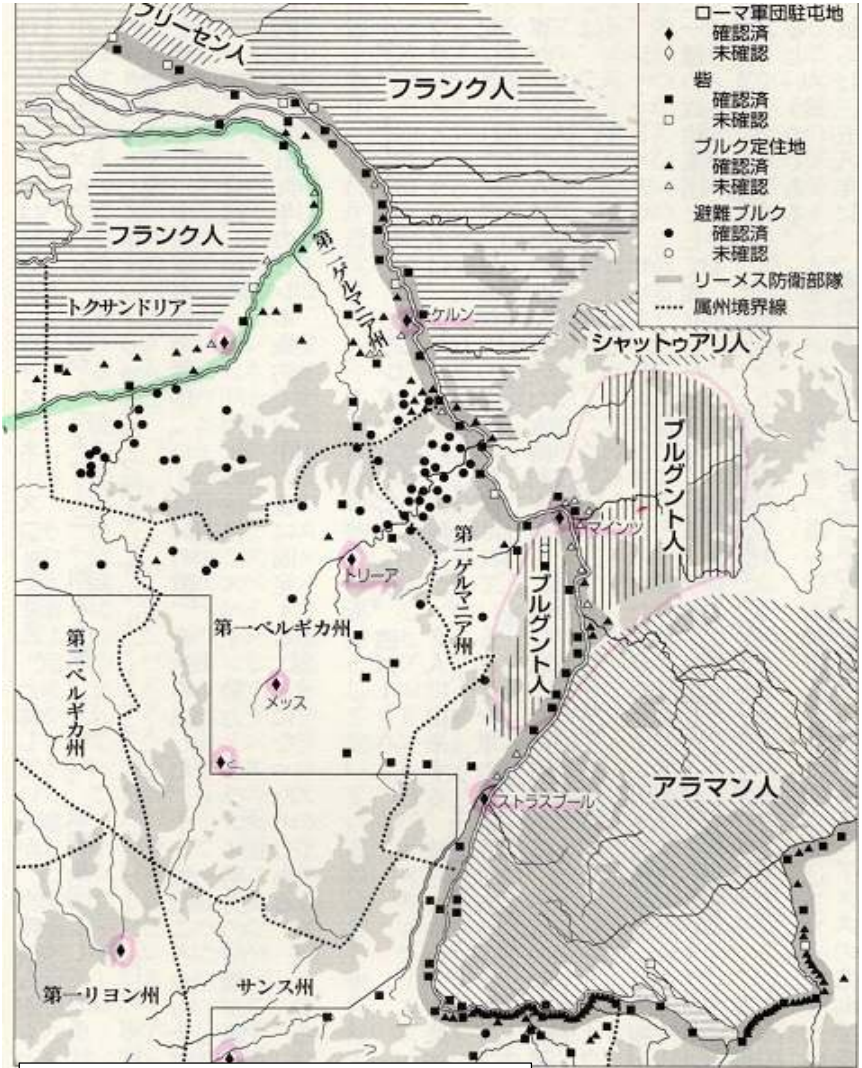


図 1, 5 世紀のライン川周辺のローマ軍駐屯地

② **キリスト教**（ユダヤ人であるイエスのユダヤ教布教活動を基に、イエスの死後弟子たちが 1 世紀に始めた宗教）

・250 年頃のフランスにおけるキリスト教徒**迫害の代表例**：

多神教を信じるローマ帝国では、各地でキリスト教徒の迫害が行われた。パリにおけるキリスト教の伝道師、ディオニシオスはローマ軍に捕らえられ、現モンマルトルの丘で斬首刑にされたが、彼は自分の首（頭）を拾ってパリ北側の現サンドニ聖堂のある所まで歩いて行った。右の写真は、後年にパリのノートルダム大聖堂を建設した時に西側正面のファサードの聖人の彫像列の中にディオニシオスを表現したものである。

16 世紀になってローマ教皇によって聖人となり、**聖ドニ Saint-Denis** 即ち、**サンドニ**と親しみをこめて呼ばれており、St-Denis はパリ北部の町や国立競技場の名前になっている。2023 年のラグビーワールドカップの主会場である。

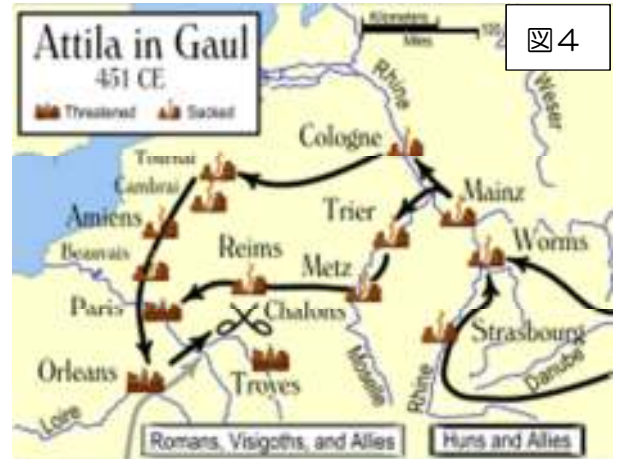


2004 年 筆者撮影

- ・313 年 ミラノ勅令：ローマ帝国がキリスト教を公認
- ・357~60 年 パリのシテ島にいた**皇帝ユリアヌス**はキリスト教ではなくて、ローマの伝統的な宗教を復活させようとして、「**背教者**」とあだなされた。
- ・380 年 キリスト教がローマ帝国の**国教**となる。
- ・476 年 西ローマ帝国は崩壊した。
- ・498 年 クローヴィスが**ランス**で聖レミから洗礼を受ける、ゲルマンのフランク人で初めて。

③ フン族の侵入

この頃のヨーロッパはフン族に悩まされていた。「蛮族の侵入－ゲルマン大移動時代」（ピエール・リシュ著 白水社）には、フン族は騎馬民族である**匈奴**と書かれているし、「フランス三昧」（篠沢秀夫著 中公新書）にもフン族は匈奴と書かれている。フランスが単独で研究し、「フランスで暴れまわったフン族は**北匈奴**が草原のシルクロードを通してヨーロッパに来た」と主張していたが、中国が研究に合流し、フン族と北匈奴は時代が約 300 年ずれていると結論し、図 2 に引用したように、フン族と北匈奴の移動ルートが切り離されている。図 2、3 共出典：詳説 世界史図録 第 3 版 山川出版社



451 年、**アッティラ**の率いるフン族はライン川を渡り、ガリアに侵攻し、オルレアンを包囲した。西ローマ帝国はゲルマン諸族の軍と共にカタラウヌムの野（Chalons-en-Champagne 付近）で決戦した。アッティラは大打撃を受けてハンガリー平原に退き、フン族の征服を免れたが、フン族の勢力は維持された。ローマ軍側も追撃不可能なほどの被害を受け、西ローマの勢力は弱まり、フランク族のガリア侵入が始まることとなった。 図 4 出典：ウキペディア「シャロンの戦い」

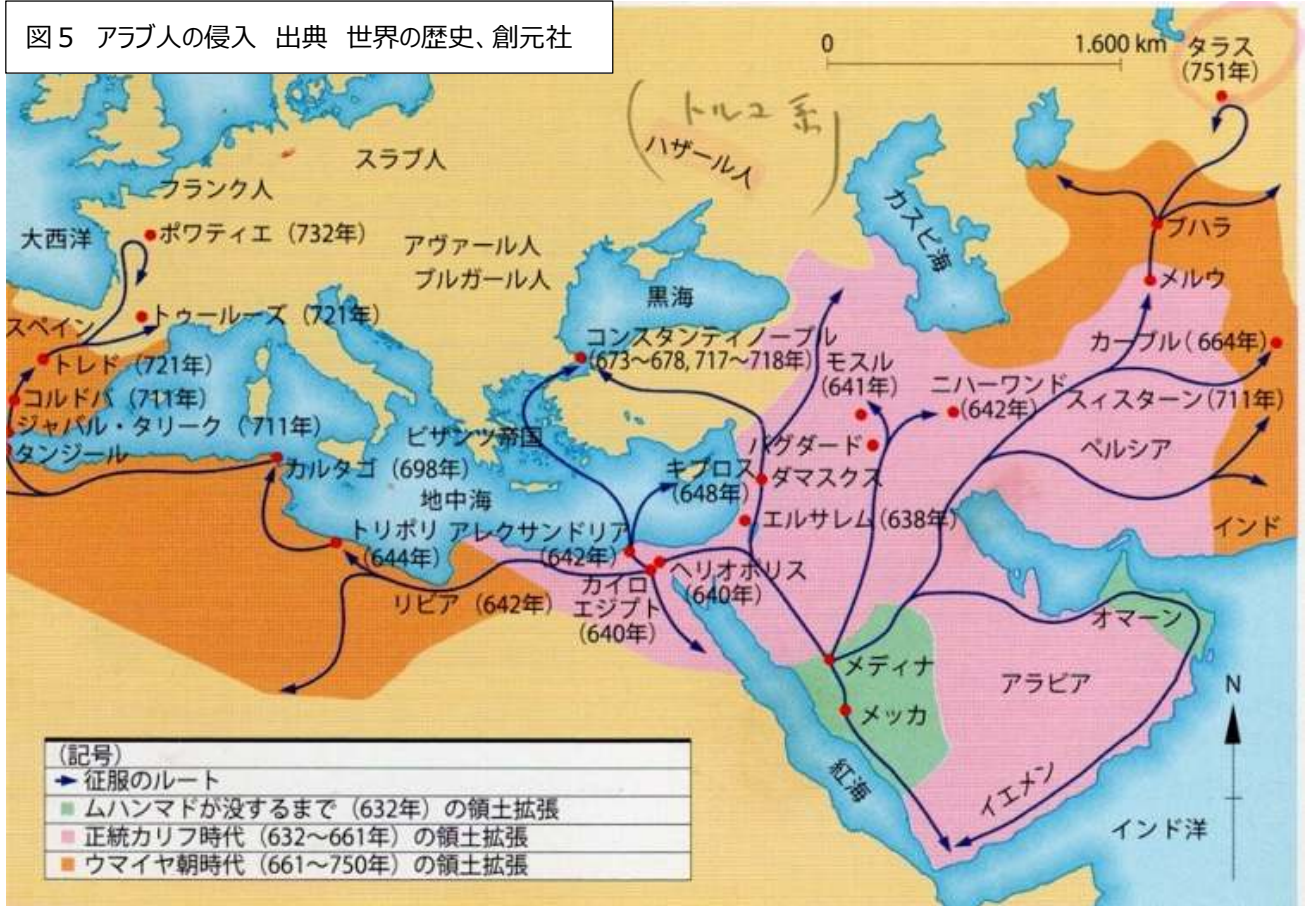
④ アラブ人の侵攻

7 世紀にムハンマドによってアラビア半島で誕生した一神教の**イスラム教**は、711 年にはジブラルタル海峡を渡ってイベリア半島に侵攻し、ムハンマドの死後 100 年たった 732 年にはフランク王国の領土内深く侵入したが、物資の補給ができず、さらに冬の寒さに悩まされた結果、ポワティエ近くで引き返している。（図 5 参照）



この時、地中海に向けて南下してくるアラブ軍を襲った**カール・マルテル**率いるフランク王国軍は、アラブ軍をうち破って勝利宣言をした（歴史の教科書はここまで）が、それでもなおアラブ軍は、その後も数年間、フランク王国領内のローヌ川上流まで侵略し、略奪行為を行った。ローマ教皇の新宮殿がある南仏の**アヴィニョン**の町には、Rue Rouge(血の通り)の道路標識があるが、多くのアラブ人が殺害されて大量の血が坂道を流れていった所だった。 08 年訪問

図5 アラブ人の侵入 出典 世界の歴史、創元社



2. **メロヴィング朝(481~751)** ~ パリに住み始めるフランスの王国の始まり ~

① **クローヴィスの生誕地 トウルネ Tournai** ~初代の国王メロヴィング朝のクローヴィスが生まれた地である~

トウルネはブリュッセルの南西 85 kmだが、08 年の訪問はパリ北駅から新幹線 TGV でフランス第 4 の都市リール Lille まで約 1 時間、ローカル国際線電車で国境を越すとベルギー最古の町トウルネである。

2000 年前にローマ帝国の兵営都市として建設され、5 世紀にフランク人のサリー族が占領し、その都となった。15 世紀にイギリスから羊毛のフリースを輸入して毛織物産業で栄え、ロンドン・ハンザ同盟都市の一つで、タペストリーの重要な供給地になった。**1513 年、英王ヘンリー 8 世に征服**され、トウルネは英国に占領されたベルギーで唯一の都市となった。1519 年にフランス統治に戻るまで英国議会で議員を出した。



クローヴィス誕生の何らかの遺跡を探したが、この道路標識だけだった。大聖堂の地下からは父親の墓が発掘されている。



出典 ミッシュラン・グリーンブック ベルギー



"Pont des Trous" bridge

13世紀に伝説でエスコール川（フラマン語でスヘルデ川）にかけられた橋で北海の海賊がアントワープから攻撃してくるのを防御するために建設された。橋の彼方に見える尖塔はノートルダム聖堂。ノートルダムとは貴婦人即ちイエスの母マリアの事で、マリア信仰の国フランスには数百の世界に数千のノートルダム教会がある。

（イギリスでは **Our Lady** という）

16世紀に神聖ローマ帝国のハプスブルク家とフランス王国ヴァロア朝がイタリアや神聖ローマ皇帝の座を巡って戦ったイタリア戦争にイングランド王ヘンリー八世が割り込んでトゥルネを占領し要塞を建設した。

② メロヴィング朝時代のフランク王国

メロヴィング王国の領土は図6に示すように、現在のフランスとドイツ・スイス・ベルギーの一部を含んでいる。

また、王国と言っても、王朝メンバーの住居、国を統治する機構、及び宗教に関わる**首都**は持っていない、彼らが有していたのは**王宮**であった。

クローヴィス最後の年511年に「**王の座**」として選ばれたのは、図1にピンクで上塗りした**パリ、オルレアン、ソワソン、ランス**であった。

歴代の王から一人選ぶなら初代の王クローヴィスが王の中の王である。

パリ北方の現ベルギーのトゥルネで465年に生まれ、

481年にガリアのソワソンに駐屯していたローマ軍団長に勝利して、16才で初代のフランク人の王に即位し、フランク人の多くの部族を統率し、498年にはランス Reims の教会で聖レミギウスから洗礼を受けている。

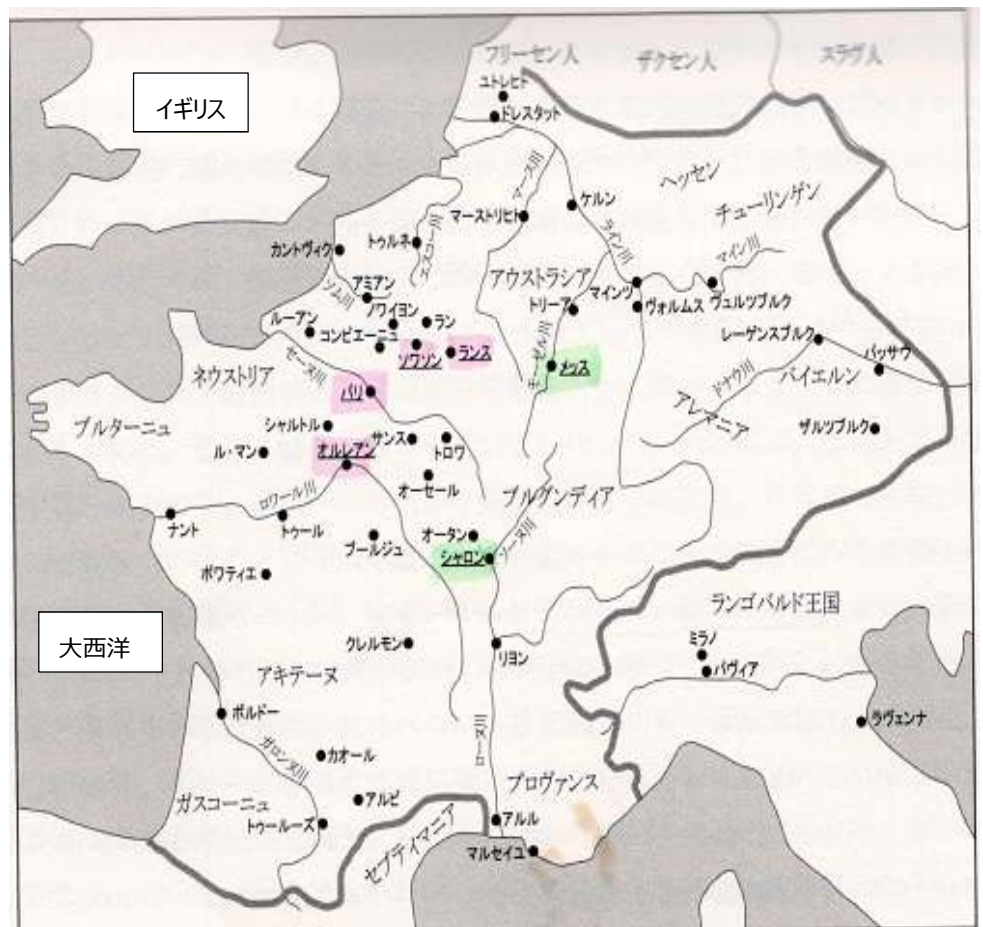


図6

メロヴィング王国

出典：メロヴィング朝 クセジュ 白水社

⑤ **ランス Reims** (ガリア人の「ランス」の音に合わせてラテン文字で綴ると Reims となるのか？ 違和感があるね～?)

シャンパーニュの中心地、ガリア人の一部族 **Remes** の要塞都市で地名も部族名が語源。ローマ属州ベルギーの首都だった。498年にフランク王クローヴィスがサンレミ聖堂で司教 Remi から洗礼を受け、ローマ的なキリスト教に改宗したフランク人は、神に選ばれたローマ人の後継者として現れた。

11世紀から1825年のシャルル10世まで25人の歴代のフランス王が戴冠式を行う政治的・宗教的に重要な場所。



図7 出典 ミッシュラン・グリーンブック

参考図2

クローヴィスの受礼 ; ゲルマンのフランク人・サリー族出身の**クローヴィス**は、481年にガリアのソワソンに駐屯していたローマ軍団長に勝利して、16才で**初代のフランク人の王**に即位。フランク人の多くの部族を統率し、498年にはランス Reims の教会で兵士に取り巻かれながら、聖レミギウスから洗礼を受けた。ゲルマン人で初めてのカトリック教徒であり、以後歴代のフランス王の戴冠式はランスのノートルダム聖堂で行われ、現在までフランスはカトリックの国である。



⑥ パリ

第 2 項②で述べたように、メロヴィング朝は首都ではなくて王宮を持っていたが、クローヴィス最後の年 511 年に「王の座」として選ばれたのは、図 6 にピンクで上塗りしたパリ、オルレアン、ソワソン、ランスであった。

クローヴィスは 481 年にフランク王に即位して以来 30 年間パリを支配し、王の座として四都市を選んだが、パリに居住したのは 508 年で、3 年後の 511 年に死亡した。

パリの居住地は、前回「フランスの城郭シリーズ その 1」で説明したシテ島のローマ帝国の長官の宮殿と考えられている。ここは軍事施設を有しており、ローマの道でガリア各地と結ばれており、長い間のガリア内戦にも耐えて都市が分割されることが無かった事で安全が証明されている。

図 8 メロヴィング朝末期の地図から分かることは ;

- ◇ 王宮はシテ島と思われるが記載されていない
- ◇ 市壁が無い
- ◇ ガロ・ローマ時代のローマの道は残っている
- ◇ ローマ時代の浴場二か所が残っている (Cluny と Baths)
- ◇ ローマの円形競技場も残っている (Arena)
- ◇ 右岸は低湿地帯だったが、都市化が進んでいる
- ◇ 歴代の王がローマカトリック信者であり、多くの教会が建設されている。

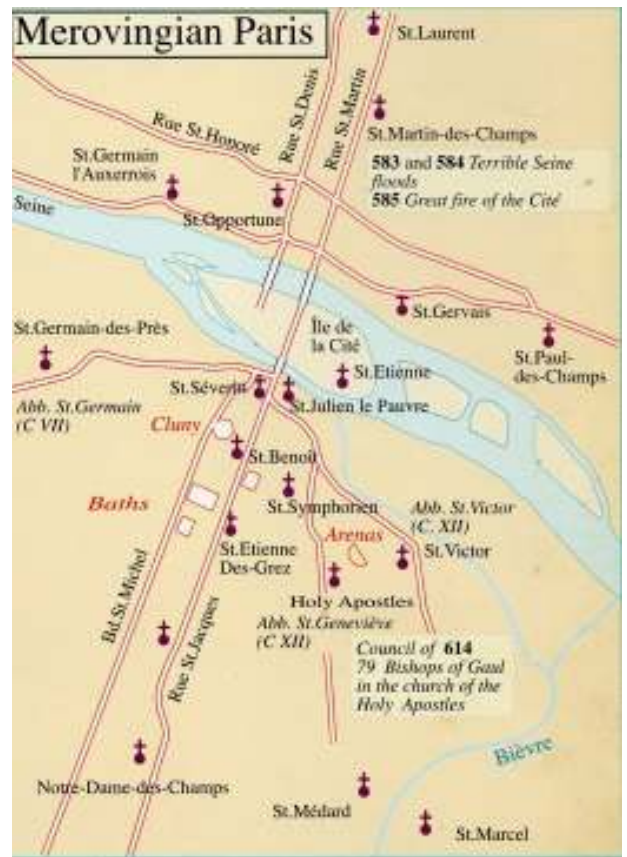


図 8 出典 The chronologies of Maurice Griffe ,Paris

メロヴィング朝のその後の王は、各地からの戦争の要請に応えたり、己の権威を在地の有力者に認めさせたり、物資

供給と狩猟の必要に応じて、宮廷集団と共に王の所領を移動した。7世紀には、王たちは都市に滞在するのをやめ、まず郊外、次いで農村の王宮を好んだ。図9は、前回「フランスの城郭シリーズ その1」で参考図2として使ったパリの市壁図だが、徴税請負人の壁（Farmers-General Wall）の北北西部に Clichy の文字が見える、ここがクリシー宮殿があった所で、現在は宮殿はないが、地下鉄の駅名 Place de Clichy に名残を残している。



次回「フランスの城郭 その3」は、フィリップ・オーギュストの壁であり、カペー朝の名君 King Philippe II Auguste (b1165-a1180-d1223)が、第3回十字軍に出発にあたり建設を指示、パリの右岸にルーブル宮殿の建設も行った。以上